

厚生労働行政推進調査研究事業費補助金
成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業（健やか次世代育成総合研究事業）
災害に対応した母子保健サービス向上のための研究

総合分担研究報告書

災害に対応した母子保健サービスに関する質的研究
—コミュニティ・エンパワメントの観点から—

研究分担者 安梅 勅江 筑波大学 医学医療系

研究協力者 富崎 悦子 慶應義塾大学

田中 笑子 筑波大学

澤田 優子 森ノ宮医療大学

【背景・目的】

深刻な自然災害が多発する中で、災害に対応した母子保健サービスの向上が課題である。本研究は、質的研究により、当事者の「なまの声」から、災害に対応した母子保健サービス向上に向けニーズとレジリエンス強化に関連する要因を明らかにすることを目的とした。さらに、明らかになった要因を整理し、災害時の対応および平時からの備えについて、保育専門職および一般向けのわかりやすいマニュアルを作成することを目的とした。

【方法】

自然災害を経験した保護者、および支援経験を有する自治体の子育て支援専門職（保育士中心）を対象として、2019年7-9月に各1時間半のフォーカスグループインタビュー調査（FGI）を実施した。FGIから得られたデータを逐語記録に起こし、当事者の「なまの声」を活かし、結果をカテゴリー化し、帰納的および演繹的に整理した。さらに、得られた専門職および乳幼児の保護者の抱える災害時のニーズとレジリエンス強化の要因に関する結果に基づき、想定される課題と対策を時期別に整理し、専門職向けおよび一般向けマニュアルとして記述した。

【結果・考察】

保護者のニーズとして“心理面”、“居場所”、“生活の安定”、“防災”のカテゴリーが抽出された。子育て支援専門職の意見は、コミュニティ・エンパワメント実現の7要素に整理された。

支援者である専門職もまた被災者であり、支援者を含め、心理生活面の充足や支援の仕組みづくりが求められる。

マニュアルは、保育士等の専門職向けと一般向けの2種類を作成し、発災時に必要な情報収集と情報発信、時期別に想定される健康上の問題と対策をまとめた。災害への備えでは、支援

者を含む当事者が、主体性を取り戻し、自助と共助が促進されるコミュニティ・エンパワメントの視点が必須であり、発災前から、重点的かつ長期的な基盤形成および継続的な長期介入の仕組みが求められる。

【結論】

子どもを持つ保護者、および保育士等の専門職への質的調査を実施した。結果から、レジリエンスを強化し、コミュニティ・エンパワメント実現に重要な要素が抽出された。今後は作成したマニュアルを地域の特性に合わせて普及、活用することにより、平時から共に災害に備え、保育施設と保護者、地域の人々のネットワーク構築につながることを期待される。

A. 研究目的

自然災害の脅威に対して、防災、減災の取り組みと並行し、発生した災害からの復興は緊急性の高い課題である。復興からの回復を促す確実な取り組みを明らかにし、実効性を高めることの重要性が高まっている。

母子保健上の課題として、先行研究において、被災地では未就学児の肥満やアレルギー疾患の増加に加え、こころの問題の存在が明らかとなっている。肥満については、地震・津波の被害から運動の機会が減少したこと、ストレスなどの心理的要因による過食が影響したと考えられる。アレルギー疾患については、被災に伴う再発・症状の悪化が懸念され、特に、避難所・仮設住宅環境による影響が示されている。

また、こころの問題に関しては大災害のストレスに加え、過去のトラウマ体験や体罰などにより問題行動が顕在化した可能性が示唆されている。こうした特徴を踏まえ、災害への対応はその特性を抑え、長期的な支援を視野に入れて設計することが重要であると考えられる。

一方、災害後の対応については、「災害

時妊産婦情報共有マニュアル 保健・医療関係者向け（東北大学 東北メディカル・メガバンク機構発行）」などに代表される様々なマニュアルがすでに作成され、実際に配布、活用されている。しかし種類が多岐に渡る点、対応時期に関して、周産期、小児期、学童期以降などでフォローアップを意図する期間が統一されていない、災害の特性を踏まえたマニュアル化がなされていないなどの課題が残されているのが現状である。

実際の災害復興においては、当事者を中心に、多職種が連携して長期的な支援体制を構築することが求められる。本研究は、当事者および子育て支援専門職を対象とし、災害に対応した母子保健サービス向上のための課題を明らかにし、必要な支援の体系的整理、システムづくりに資することを目的とする。

B. 研究方法

本研究では、保護者および専門職の2つの側面から質的な検討を行い、その結果をマニュアルとして整理した。

1. 保護者が求める支援：当事者の声からの検討

災害時に子育て中であった保護者に対して、災害時にはどのような対応が必要なのか、どのような支援が求められているのかをたずねた。先行研究で述べられている支援内容と、当事者が感じている重要性の高い支援との間にみられる相違について検討した。

(1) 参加者と方法

参加者は、災害経験後3年の自治体Aの住民、1グループ6名（男性1名、女性5名）および60年前に水害を経験した自治体Bの住民、4グループ18名であった。子育て支援センター利用者5名、保育園父母の会3名、障害児の親の会5名、学童クラブ利用者5名の4グループである。

1つのグループにつきリクルートする人数は、それぞれグループダイナミクスが最も起こりやすい6~10名程度とした。しかし、諸事情により当日参加がキャンセルになるなどの関係で6名とならなかったグループもあった。

参加者の選定は、年齢、性別、職業等、多様な背景から当該テーマに関するニーズ把握が可能になるよう、地域に精通している自治体の担当者に依頼した。調査日は2019年8月~9月である。

データの収集にはフォーカス・グループ・インタビュー（以下FGI）を用いた。調査場所は住民が住んでいる施設の静かな個室とし、参加者の承諾を得てICレコーダーとビデオカメラを設置し記録した。

情報を確実に記録するため、観察者による観察記録を作成した。参加者が発言しやすいよう観察者は目立たない場所で観察お

よび記録を行った。インタビュー中は番号札を参加者の名前の代わりにすることで、名前が表に出ないことを保証し、安心して話ができるように配慮した。調査時間は各グループ1時間から1時間半程度であった。

自治体Aにおける調査項目は、「被災から復興時に困ったこと」「復興時に役に立ったこと」「復興時あるとよかったこと」についてである。自治体Cでは、直接的な被災経験者ではないことを考慮し、「子どもたちが安心安全に暮らせる地域づくりのために必要と考えていること」をたずねた。

(2) 分析方法

ICレコーダーに録音された記録から正確な逐語記録を作成し、観察記録とビデオカメラの録画記録による参加者の反応を加味しながら、テーマに照合して重要な言葉（重要アイテム）を抽出した。

抽出した重要アイテムは、保健師、看護師、作業療法士、研究職等複数の分析者で確認しながら、逐語録から参加者の反応を加味し、テーマに照合して重要な言葉や文章の要約（以下、重要アイテム）を抽出した。抽出された重要アイテムを類型化し、サブカテゴリーおよび重要カテゴリーを抽出した。

重要アイテムの類型化、および抽出したサブカテゴリー、重要カテゴリーについては、グループインタビューに精通した専門家のスーパーバイズを受けた。重要アイテムの意味することと、類型化およびカテゴリーの抽出にずれがないことを確認した。

2. 災害に対応した母子保健サービスに関する質的研究：エンパワメントモデルから

保育士を中心とした子育て支援専門職を対象に、当事者の「なまの声」から、災害に対応した母子保健サービス向上に向けニーズとレジリエンス強化に関連する要因を検討した。

(1) 参加者と方法

参加者は、2011年および2016年に地震災害を経験した自治体AおよびCの専門職とした。災害時に支援経験有保育士を中心とした子育て支援専門職2グループ、12名である。

参加者の選定は、年齢、性別、職業等、多様な背景から当該テーマに関するニーズ把握が可能になるよう、地域に精通している自治体の担当者に依頼した。調査日は2019年9月である。

データの収集にはFGIを用いた。調査場所は自治体の会議室等の静かな個室とし、参加者の承諾を得てICレコーダーとビデオカメラを設置し記録した。

情報を確実に記録するため、観察者による観察記録を作成した。参加者が発言しやすいよう観察者は目立たない場所で観察および記録を行った。インタビュー中は番号札を参加者の名前の代わりにすることで、名前が表に出ないことを保証し、安心して話ができるように配慮した。調査時間は各グループ1時間半であった。

(2) 分析方法

分析は、ICレコーダーに録音された記録から正確な逐語記録を作成し、観察記録とビデオカメラの録画記録による参加者の

反応を加味しながら、テーマに照合して重要な言葉（重要アイテム）を抽出した。

抽出した重要アイテムは、保健師、看護師、作業療法士、研究職等複数の分析者で確認しながら、逐語録から参加者の反応を加味し、抽出された重要アイテムを類型化した。

分析過程においては、グループインタビューに精通した専門家のスーパーバイズを受け、重要アイテムの意味することと、類型化およびカテゴリーの抽出にずれがないことを確認した。

3. マニュアルの作成

(1) 対象

対象は、保育士等の専門職と、保護者等とし、対象の特性を踏まえて、マニュアルの内容（項目）や量、表現について調整を行い、専門職向けと一般向けの2種類を作成した。

(2) 方法

初年度に得られた専門職および乳幼児の保護者の抱える災害時のニーズとレジリエンス強化の要因に関する結果に基づき、マニュアルを作成した。具体的には、発災時に必要な情報の収集・発信、発災後に想定される健康上の問題と生活上の問題、平時からの備えについて保育士等の専門職を対象にマニュアルとして具体的に記述した。あわせて、一般向けに図を用いて要点を抽出し、平易な表現でマニュアルとして記述した。1) 専門職向けマニュアル

保育士を中心とした子育て支援専門職を対象に、当事者の「なまの声」から得られた知見に基づき、発災直後から必要な情報

収集と情報発信、想定される健康問題と対策、平時からの備えについて、マニュアルを作成した。

2) 保護者（一般）向けマニュアル

保護者など一般向けに、当事者の「なまの声」から得られた知見に基づき、発災直後から必要な情報収集と情報発信、想定される健康問題と対策、平時からの備えについて、要点を抽出し、平易な表現でマニュアルを作成した。

4. 倫理面への配慮

本研究は、森ノ宮大学倫理委員会（2019-065）の承認を得て実施した。参加者には事前に、インタビューの目的、方法、名前や所属などの情報が外部に出ないこと、インタビューに参加したことでのいかなる不利益も受けないことを口頭で説明し、インタビュー参加への同意を得た。

ICレコーダーとビデオカメラによる記録は、記録を撮る理由を説明し、参加者の承諾を得た上で実施した。インタビュー中は番号札を参加者の名前の代わりとし、匿名性を担保した。データは厳重に鍵のかかる場所で保管した。

C. 研究結果

1. 保護者が求める支援：当事者の声からの検討

心理的な内容は、「体験の認知」「時間による変化」が示された。居場所に関する内容は「子どもの居場所」と「保護者も楽しめる」などの内容が語られた。生活の安定は「避難」「支援」「情報」に関して語られた。防災は、「活動」「防災意識」「教育」

について語られた。過去の大災害の記憶のある地域で子育てしている保護者からは、防災について語られた（表1）。

以下、文中において重要カテゴリーは「」、重要アイテムは『』で示す。

(1) 心理的な内容

1) 体験の認知

『気持ち』『地元の見直し』『つながり』『年齢による認知の違い』について語られた。災害時に避難する際の恐怖感や防災音に対する恐怖感が語られた。また、年齢により反応が違うように感じられていた。個々の子どもごとに、また、乳幼児期、学童期、思春期という発達時期ごとに反応の違いがみられたことが語られていた。加えて、地元を見直す機会や、つながりを感じる機会となったことが語られた。

2) 時間による変化

『時間の必要性』『成長にともなう変化』について語られた。3年経過したことにより、やっと動き出すことができるようになった、3年たったからこそ振り返りたい等の語りがきかれた。あわせて、子ども自身が成長していることで、当時とは異なると感じていた。

(2) 居場所に関する内容（表2）

1) 子どもの居場所

『預ける場所』『あそび場』について語られた。預ける場がなく片付けなどがはかどらなかった、実家に帰り子どもが転校して辛い思いをさせた、という思いが語られた。

一方で保育園やボランティアの援助により、子どもたちがのびのびと遊ぶことがで

きて助かったとしていた。

2) 保護者も楽しめる

『イベント』について語られた。多くのボランティアの活動に対する感謝がきかれた。子どもより保護者が喜んでいることが多く、子ども向けのイベントもあるとうれしかったとの語りがきかれた。

(3) 生活の安定 (表3)

1) 避難

『日常生活』『避難場所』について語られた。

トイレの衛生的な面での問題や、洗濯が大変であったこと、入浴については温泉の開放などありがたいが、小さい子どもには衛生面から使いづらい、など日常生活が大変なことがうかがえた。また、避難場所は子どもがいると使いにくいとしていた。

2) 支援

『食べ物』『日用品』『生活』について語られた。多くの支援があり、食べ物や日用品だけではなく、温泉の開放や掃除の支援などありがたいとしていた。乳幼児では温泉は使いにくく、物品が上手に配布されないなどが多く語られた。

3) 情報

『役立つ情報』『不足した情報』について語られた。LINE を上手に使用し情報を得たものの、避難すべき場所がわからず困難を感じたとしていた。

(4) 防災 (表4)

1) 活動

『準備』『イベント』について語られた。保育園では子どもたちは裸足で過ごしていたが、震災後はすぐに避難できるよう

に靴を履くようになったなど震災後の変化が語られた。次の災害に向けた準備や学校との連携、建物の強度など準備がたりていないのではないかとした内容が多く語られた。また、イベントを通して防災活動を続ける重要性和難しさ、および必要な工夫が語られた。

2) 防災意識

『意識』『情報』について語られた。被災したことのない地域では、自分の住んでいるところは大丈夫だと安心してしまう。大丈夫だといった意識を持ってしまおうと語られた。一方で被災した住民も日々の忙しさのために災害のための準備が必要であることを忘れてしまっている現実が語られた。情報の発信により、防災意識を継続する必要性が語られた。

3) 教育の充実

『生きていく力』『助けを求める力』について語られた。教育を通して、災害に直面しても生きられる力、困った際には助けを頼める力を身につけてほしいという希望が語られた。

2. 災害に対応した母子保健サービスに関する質的研究：エンパワメントモデルから

保育士を中心とした子育て専門職により語られた内容を、コミュニティ・エンパワメント実現の7要素、すなわち1) 目標の明確化、2) 参加者を巻き込む、3) 対象地域の諸機関をネットワーク化する、4) 柔軟な参加形態が可能な形で組織化する、5) 定期的に成果をフィードバックする、6) 楽しみをもたらす企画を実施する、7) 発展可能性を継続的に提示する、を参照して重要カテゴリーとした。

以下、文中において、サブカテゴリーを《》で示す（表 5 - 1、 5 - 2）。

（1）目標の明確化

《避難方針と判断》、《避難所運営》、《親子を守る》、《長期的視点からの生活支援》、《年齢、立場による違いへの理解》、《心の健康への理解》の6つのサブカテゴリーが抽出された

（2）当事者の参画

《避難マニュアル制定への当事者参画》、《避難所運営方針への当事者参画》、《主体性を取り戻す》、の3つのサブカテゴリーが抽出された

（3）柔軟な参加形態の組織化

《妊婦と乳幼児、病気や障がいのある子どもの居場所》、《学生の参加と支援者》、《リーダーの存在》、《外部の支援者》、の4つのサブカテゴリーが抽出された。

（4）地域諸機関のネットワーク化

《避難に関わるネットワーク》、《避難所運営に関わるネットワーク》、《健康支援と生活再建に関わるネットワーク》、《地域外の専門職や民間団体とのネットワーク》、《切れ目のないつながりへの工夫》、の5つのサブカテゴリーが抽出された。

（5）定期的な成果のフィードバック

《子どもへの継続的フォローアップ》、《専門職としての選択と行動》、《復興の実感》、の3つのサブカテゴリーが抽出された。

（6）楽しみをもたらす企画

《子どもが心から楽しめる場所づくり》、《誰もが楽しめる機会の提供》、の2つのサブカテゴリーが抽出された。

（7）発展可能性の継続提示

《子育てコミュニティの整備》、《発災前からの自助、共助》、の2つのサブカテゴリーが抽出された。

3. マニュアルの作成

（1）専門職向けマニュアル

1) 必要な情報収集と情報発信

保育士が必要な情報として、園内の人的・物的損傷と避難の必要性、保護者の現在地と状況、いつ頃、誰が子どもを迎えに来るか、自治体からの避難に関する情報、近隣地域の被災状況、ライフラインの被災状況、避難所（母子避難所）の開設状況、平時から配慮を要する家庭やかかわりの気になる保護者の心理社会的状況がある。保育士が避難時に持出、共有する情報としては、児童名簿、緊急連絡簿、アレルギー、障害、養育困難等の平時から配慮を要する家庭の情報がある。保護者等が必要としている情報としては、子どもの現在地、子どもの状況、近隣地域の被災状況、ライフラインの被災状況、避難所（母子避難所）の開設状況などがあげられる。

情報収集および発信の対象としては、保護者だけでなく、自治体の担当者、保健師・社会福祉士・臨床心理士などが該当する。

2) 想定される健康問題と対策

医療・健康的問題と、避難生活上の問題に大別される。医療・健康的問題では、避難

中の感染症発生、アレルギーや疾患対応に必要な食事や薬の入手困難、災害後に経験する不安や、制限のある生活の中で、主観的健康感が低下する、避難生活の長期化により、DVや虐待の危険性、発見の困難性が増大する懸念があり、専門職としての対応が必要である。

避難生活上の問題では、避難時、家族と再会するまでの子どもの不安、子どもが日常生活を送る上での不安と混乱、経済的な問題等による家庭内の不安と緊張の高まり、子どもと保護者の関係性の質低下、避難生活の長期化による保護者の疲労等から子どもとのかかわりの質低下、引越等の環境変化にともなう生活の不安定化などがある。

3) 平時からの備え

保育施設など保育実践の場では、毎月災害を想定した避難訓練等が行われている。災害時は、施設の保育士のみで子どもたちの安全な避難は困難と想定される。地域住民と協力し、平時から共に準備する連携が不可欠であり、自治体との連携も非常に重要である。避難時に子どもたちの不安を軽減するよう、子ども自身が園内での避難訓練経験や避難先のイメージを持つこと、一緒に避難する地域住民を見知っていることが重要である。

また、専門職は日ごろから保護者の状況の把握が求められる。平時から災害時の連絡の取り方等を保護者と共有し、連絡、連携の手段を複数確保しておく、さらに、子どもと保護者の特性を理解し、子どもの成長発達や保護者の状況を平時から必要に応じて専門職チームと共有することが欠かせない。信頼関係の構築が、災害時と災害後

の円滑な支援遂行に非常に重要である。

なお、基本的な前提としては、組織（施設）としての対応方針があり、保育士はその対応方針にそって対応する。災害時に、施設長などが不在の場合もあるため、保育士も対応できるように、マニュアルでは、施設長等など、施設の責任者として対応する内容も、個々の保育士が対応する内容として記載した。

(2) 保護者（一般）向けマニュアル

1) 必要な情報収集と情報発信

①情報収集

対象は、保育施設、保育士保育施設の職員であり、内容は、緊急時の保育施設の避難先、避難経路、連絡方法、避難後の絵本やおもちゃを含めた必要な品々の入手方法である。

具体的な方法としては、電話や園の情報共有システム、園HP、園のSNSからの情報収集、引き渡し訓練、避難訓練参加、クラス懇談会参加、園だより、保健だより、園HPなどに目を通す、ラジオ、自治体HP、ケーブルテレビなど地域の情報ツールから情報収集があげられる。

②情報発信

対象は、保育施設、保育士等の保育施設職員、乳幼児を養育している保護者であり、内容としては保護者の状況（居場所、子どものお迎え予定）、困りごとや子どもの状況である。具体的な情報発信の方法は、電話や園SNS、園と保護者間の情報共有システムから発信、保護者同士のSNSなどがあげられる。

2) 想定される健康問題と対策

避難生活が長期化する中で、保護者自身が心身ともに疲れやすく、子どもとのかか

わりを含めて、子育ての大変さが高まることが懸念される。保護者自身が、自分の気持ちを吐き出す場がない状況が続くと、気づかないうちに自分を追い詰めてしまう危険があることから、対策として、保育などの支援や相談相手が必要であることを示した。具体的には、託児（一時保育等）や遊び場を利用し、親子で十分に体を動かし、感情を発散できる場を設ける、保護者自身が自分の気持ちを吐き出せる場所、安全とプライバシーが保たれる場所を見つける、自分の時間を持ち、自分自身を思いやることで、疲労や負担感軽減につなげることを示した。

また、食事、トイレ、お風呂など、いつもと違う生活が子どもの不安や混乱につながることを取り上げ、対策として、子どもと家族の生活の安定の重要性を示した。

子どもが安心して遊べる場や機会がないことに関して、当事者の声を紹介し、対策として、子どもたちができるだけ普段どおりに遊ぶことができるよう場を整え、時間を設ける方法について、具体例をあげて示し、地域とのつながり、保育施設とのつながりを深めることを示した。

3) 平時からの備え

災害時は、施設の保育士等の職員のみで子どもたちの安全な避難は難しく、地域の大人の協力が欠かせない。そのため、平時から共に災害に備え、保育施設と保護者、地域の人々のネットワークが重要となることを示した。具体的には、「日ごろのかかわりを通じて、保育士と保護者が互いを知る」、「地域皆で助け合う関係をつくる」、「様々な形の避難訓練を通じて、いざというときの不安を減らす」という3点をあげ

て解説した。

D. 考察

1. 保護者が求める支援：当事者の声からの検討

災害時に必要な支援について、当事者の声を丁寧に把握した。これまでの研究内容で重要と言われている、心理面、子どもの居場所、防災に関して、当事者のニーズはどのようなものであるかを比較できるような心理面、子どもの居場所、防災に関してどのような内容が語られたかをまとめた。その結果、心理面のサポートや居場所の重要性に関するニーズが聞かれた。さらに、生活の安定の重要性と防災に関してのニーズも多く語られた。

心理面に関して、災害後の子どもの心のケアに関する多くの特集が生まれ、PTSDやグリーフケア、レジリエンスなどについて解説され長期的に子どもを見守る重要性が述べられている。

本研究では、中高生の方が乳幼児よりも恐怖を感じている、子どもの性格により避難訓練時に配慮した経験、当時はあまり感じなかった怖さが3年後に記憶として出てきているなどが報告された。子どもの特徴により、あるいは年齢により感じ方、体験の恐怖の出てくる時期、表現方法が異なる点が明言された。さらに、教員のかかわり方の重要性が述べられ、配慮の必要性が示された。

居場所に関しては、環境が変わることによるメリットとデメリットがあげられた。他地域に移動すれば、より安定した生活を送ることができる利点がある。しかし被災地で行われている細やかな支援が受けられ

ず、疎外感を感じ、心を封印するリスクの可能性が述べられた。災害後に移動する場合は、移動しない子どもとは違う視点での援助が必要であるとしていた。

子どもがいると避難所では生活しにくく、家の庭や車中泊となる報告が多くある。本研究でも同様に、子どもと共に過ごす避難生活場所が切実な支援ニーズとしてあげられた。

物資の支援などがうまくいっていない様子が語られ、「子ども、高齢者、ペットの空間を分けると物資も運搬しやすい」など意見が聞かれた。

防災に関して、「乳幼児の家族は、災害対策の知識はあっても行動をとまなう災害対策ができていなかった」と橋浦¹⁾は述べている。本研究でも、子育て中に大災害を経験していない地域の保護者からは、知識があり必要なことなどについて語られていた。しかし、保育園や学校との連携など防災のための準備が不足しているとも感じていた。

避難訓練など「子連れでも参加しやすい工夫をしてほしい」とした意見があり、地域全体で住民を巻き込んだ対策が重要である。

一方、防災意識では「どこかで安心してしまう」と語られた。災害を経験した当事者は「その時は防災意識が高いが、忘れてしまう。忘れてはいけないはずだが」と実感が語られた。

松澤²⁾は東日本大震災の2年後に調査し、9割以上の母親が災害に対して備えを実践していたと述べている。しかし、備蓄は多いが連絡先の取り決め等の行動面では少ないとも述べている。また、松永³⁾は東

日本大震災の3~4年後の調査で物品を備える、環境を調整する、訓練・教育をする、想定をするなどの防災対策を行うようになったことが明らかにしている。

また、教育の充実に関しては多く語られた。子ども一人ひとりが災害時に生き抜く力を身につけてほしいという思いがあふれていた。

2. 災害に対応した母子保健サービスに関する質的研究：エンパワメントモデルから

エンパワメントは、当事者が自らの力を信じ、よりよい方向に向かい自発的に取り組むことを目指す状態である。人びとに夢や希望を与え、勇気づけ、人が本来持っているすばらしい、生きる力を湧きあがらせることであり、「湧活」と言い換えられる。エンパワメントには当事者自身が課題解決の力をつけるセルフ・エンパワメント、仲間や団体を巻き込むピア・エンパワメント、地域、組織や社会システムの変革につながるコミュニティ・エンパワメントの3種類がある。専門職、特に子育て支援専門職にはコミュニティ・エンパワメント技術の活用が期待されている。

本研究で語られた内容から、専門職と子どものかかわり、専門職と保護者とのかかわり、専門職同士のかかわりが相互に影響し合い、地域へと活動が拡大していくエンパワメントのニーズと可能性が認められた。

さらに、コミュニティ・エンパワメントを効果的に展開するためには、家庭内や地域社会とのつながりを大切にする事、子どものかかわりの質を大切にする事、生活習慣など乳幼児や学童の環境を整える

ことが求められている。本研究では、複数の専門職から、災害時に生命の安全確保や生活再建が重視される一方、つながりが途切れた状態や不安定な生活環境、かかわりの質的低下がみられたことが、子どもの経年的な発達と心の健康に負の影響を及ぼした可能性への懸念が述べられた。専門職自身の支援経験から、保護者への生活面や情緒園への支援の重要性が語られ、日常的なかかわりを通じて子どもに長期的に影響するため、次世代育成の観点から命を守ること同様に重要であると考えられた。特に、家庭内や地域社会とのつながりは、一朝一夕で構築されるものではなく、地域性や日常の積み重ねから生まれる相互理解や信頼関係に基づき醸成されている。このため、発災前から、重点的かつ長期的な基盤形成および継続的な長期介入が必要である。当事者ニーズは多様であるが、心理生活面の充足は重要であり、主体性を取り戻し、自助と共助が促進されるコミュニティ・エンパワメントの視点が必須である。

本研究は、東日本大震災、熊本地震、伊勢湾台風で甚大な被害を被った3自治体の限られた人数の参加者による成果である。質的研究は、本質の探索に有用とされているが、統計学的理論に基づいて妥当性を評価することは困難である。量的研究と比較すると偏りについて数値的に明らかにすることは難しく、その点が限界といえる。

そのような限界性を踏まえつつ、FGI法の内的妥当性について以下のように確保した。

1) インタビュー項目は、参加者が話しやすいように半構成的し、参加者がインタビュー中に自由に意見を述べ、討論すること

が容易なように配慮した。

2) FGIの進行は、研究実施者がインタビュアーを担当した。参加者の自由な発言やグループダイナミクスを効果的に促進できるようにインタビューガイドを作成し、事前にトレーニングを積んでから実施した。インタビューは、グループダイナミクスにより、過去の経験が無理のない雰囲気できり想起できるよう配慮し、できるだけ参加者の自由な発言を促した。

3) 分析は、逐語記録と観察記録から重要アイテム、重要カテゴリーの妥当性につき、複数の専門職間で議論を重ねて抽出した。また、FGIに精通した専門家のスーパーバイズを受けた。

今後は質的研究から得られた結果をもとに量的な研究を追加し、質的データと量的データを組み合わせて分析し、発展的に検討していく必要がある。

3. 災害に対応した母子保健サービスの質向上に向けたマニュアルの作成と活用

母子保健と福祉の連携・協働に関して、保育所等の施設で働く保育士は、日常的に子どもと保護者に直接かかわり、支援を提供する存在である。子どもの安全を守り、保護者に確実に再会できるよう配慮することが重要である。発災時はまず園内にいる子どもと職員の安全を確保し、必要に応じて速やかに避難する。子どもの安全を守るためには、自治体からの情報を十分に把握するとともに、電話、一斉連絡メール、災害伝言ダイヤル、災害用掲示板等を活用する。避難先が分散したり通信が遮断したりするなど、誰がどこにいるか所在の確認が非常に困難となった場合であっても、刻々と変化する

る状況を踏まえつつ、子どもの状況を保護者に発信、保護者の状況を把握することが求められる。

また、発災後に子どもと家族を取り巻く環境が大きく変化する中で、保護者が助けを求めるためのハードルを下げる仕組みが必要である。保護者が、どこに何を相談して良いかわからないときは、保育施設の職員とのつながりを生かして、仲間や保育施設の職員などに助けを求めることが困難から抜け出す最初の一步となる。災害時の被災状況は人によって違いがあり、「みんな大変だから私だけ助けを求めるなんて」と助けを求めることを我慢しなければと考える保護者もいる。しかし、助けてもらうことが、逆に他の誰かの助けになることもあり、「大変だ、と言ってもよい場所を作る」ことで、自分以外の、「助けて」と言えない保護者が、気持ちを話しやすくなることもある。人に助けられ、人を助ける経験は、「互いを信じ、認め合う」という、当事者の力を呼び覚まし、日常を取り戻す力につながることで期待される。

今後は、作成したマニュアルを地域の特性に合わせて普及、活用するが必要である。平時から地域生活の中で共に災害に備え、保育施設と保護者、地域の人々のネットワーク構築に活用されることで、当事者の力、地域の力が引き出されていくことが期待される。

E. 結論

本研究ではコミュニティ・エンパワメントの視点から、保護者および保育士を中心とした子育て支援専門職への質的調査を実施した。当事者の「なまの声」を活かし、

コミュニティ・エンパワメントの視点から質的に検討した。災害に対応した母子保健サービス対応に向けて、レジリエンスを強化し、コミュニティ・エンパワメント実現に重要な要素が抽出された。

保護者および専門職自身のエンパワメント、専門職同士の仲間エンパワメント、組織や地域の力を引き出す地域エンパワメントを統合的に活用する必要性が示され、本研究で得られたエンパワメント実現の具体的な要素を組み込み、専門職および一般向けのマニュアルを作成した。マニュアルの普及と活用により、レジリエンス強化に向けた相乗的な効果の創出が期待される。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

田中笑子、富崎悦子、澤田優子、安梅勅江、災害に対応した母子保健サービスに関する質的研究—コミュニティ・エンパワメントの観点から—。小児保健研究。2020; 79: 415-421.

2. 学会発表

該当なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

該当なし

2. 実用新案登録

該当なし

3. その他

該当なし

参考文献

- 1)橋浦 里, 永田 真. 地域で生活する乳幼児の家族における災害対策に関する文献検討. 関東学院大学看護学会誌 = Kanto Gakuin University journal of nursing. 2018;5(1):1-6.
- 2)松澤 明, 白木 裕, 津田 茂. 乳幼児を育てる家庭における災害への「備え」：東日本大震災を経験した通園児の母親への調査より. 日本小児看護学会誌. 2014;23(1):15-21.
- 3)松永 妃, 新地 浩. 大規模な災害を乳幼児と経験すること：母親達のストレス要因となる被災経験とは. 日本災害看護学会誌. 2017;18(3):3-12.

表1 心理面のニーズ

心理	気持 ち	準備していたんですが、いざ起こると、それどころでなくて今回は着の身着のまま小学校へいって、いく時も停電で真っ暗でガスの嫌な臭いもして「恐いな」と。両方から狭い道に瓦とかが落ちてきて。
		「ピーッ」て音ですね。地震がくる前の音、大人でも恐いし、子どもはトラウマになっている。あの音がないと、ちゃんと逃げられないかもしれないけど、あの音が恐怖になっている。
		防災音は「危険だ」と、やわらかく、わかる音にしてほしい。
		明るい音楽ではいけないと思うけど、防災のあの音は恐い。いい音というがないのかなと。ピクッとなる。解除の音も。どうかならないかなと。
	地元の 見直 し	汁物、手づくりの味噌汁とか、あたたかいものが、心も、あたたくなって。
		町の自然環境に励まされて生活していたんだなと気づいて。もう一度、町を見直して「親子向けのマップ」にできたらいいなと。
		深呼吸して励ましあいながら。町の魅力を知って、空を見て大丈夫というのがあればと、そういう思いでマップをつくりました。
	つな がり	ママたちは震災後から走ってがんばっていたから、ほっと癒されるところが益城で見つければいいなと思って。
		地震があつて気づいたことは「一人じゃ、何もできなかったこと」。みんなが協力してくれて県外の人がきてくれて助けてもらったことで復興した。「つながり」を大事に感じてほしい。
	体験 の 認 知	地域の方が声をかけてくれて「子どもさんだけ先にベランダから出して」とか、日頃、話したこともない人にいわれて。小学校も地域密着なので、私たちは余所ものですけど、町の人のように扱ってくれて周りに助けられたので。もっとイベントとかがあれば、と思います。
		しばらく、子どもが、トイレに一人でいけなくなったかな。お風呂も、ちょっと。「地震がくるから」と。
		保育園が始まれば、べったりではなくなって。
		低学年で保育園だから地震はわかるけど、「恐い」という認識が、まだない。
		「恐い」とはいつてなくて「今の、気づいた？ ママ」「ママは気づいた」という楽しいイメージで。
		「ここでキャンプしたよね」と記憶がすり変わってしまっている。
		中学生になると大人と同じ感覚でわかる。周りを見て「悲惨な状態だ」とわかるとトラウマが残るというか。
		上の姉が受験生だった時、本棚が倒れてきて。それを怖がって「アパートには帰りたくない」と。記憶が残るから。
		高校生の親戚が地震の時、お風呂のドアが開かなくなった。パニックになって実家に避難しても「家には戻りたくない」と。一人で恐い場면을体験していると嫌なのかなと。
		「どこで、どんなことがあっても絶対、助けにくるから大丈夫だ」というようにして、そうしておくこと、安心して。
	年 齢 に よ る 認 知 の 違 い	時間とともに忘れはするけど、当時は、すぐには「戻りたくない」と。
風とか台風とかは怖がります。揺れたりすると「ワーッ」となります。言葉はなくても自然災害を怖がっている。今、6歳で。今頃、出てきているかなと。理解してきたのか「体で覚えていたんだな」と。		
うちの子も「そういうところがありますね」と先生からいわれたことがある。		
音も、とんでもなかったけど。「エーッ」となって。しょうがないですけどね。		
あまりいうと、ビビリだから。「明日は訓練がある。ここまでしかやらないから大丈夫だよ」と事前についてくれて大丈夫みたいですね。		
やっと「がんばって直そうかな」という気になって。今までは「がんばろう」というのが出なくて、3年たって「ぼちぼちやろうかな」という気持ちに上向きになったかなと。		
時 間 の 必 要 性	早くしようと思っていたんですが、そこまでいかんかったですね。なんで、でしようかね。	
	3年となると「もう動かんといかん」と。3年ほったらかしだとダメだろうと。「時間」ですかね。	
	あの時はみんなが大変で「私、こうだった」といえない状態で。3年たって、ようやく振り返る時間、ができて、今、つながってきたんですね。あの時は我慢していたので私だけが「大変」といえなかった。3年たって地震の話をみんなできて「あの時は、ああいう気持ちだった、大変だった」という時間が、今だから言えるのかなと。溜まっていたものが自然に出てくる。	
	当時は、やらないといけないこともあるし、子どものことも、おじいちゃん、おばあちゃんのこと、親のこと、仕事もあるし。気持ちを保つことがいっぱい、みんな大変だから、いえないし、今は整理もできて。共有する時間を。	
時 間 に よ る 変 化	成長に伴う変化	
	子どもも3年間で成長するので、その時にできなかったことが、できてくると、あの時はつれていけないといけいのが、今は「自分たちでできるだろう」と。小さい時は、おねしょもするし、今は大丈夫な年齢になった。	

表2 居場所に関するニーズ

居場所	子どもの居場所	預ける場所	子どもを預ける場所がない。保育園も学校も休みで家の片づけもしないといけない。仕事にもいけないといけない。子どもが家にいると不安だし、余震もあったし。
		預ける場所	保育園をオープンにしてあって保育園で預かってくれて、その間に私は病院にいたり、お母さんたちと交代でみたりしている間に家の片づけにいくので「次はあなた、どうぞ」と。子どもも遊んで給食もつくってくれて。そんなに多くなかったから、できたことだと思うけど、その時は助かりました。
		預ける場所	小学校に「学び場」ということで大学生が子どもたちを見てくれることがあったので助かったという話は聞いています。震災後、3年たつんですが、今もきてくださって「とても助かっている」という声は聞きます。
		預ける場所	家を片づけにいきたい。子どもをつれていくと危ないし、子どもを見ていたら片づけができないし。
		預ける場所	嫁の実家に子ども二人受け入れもらって、ありがたかったかなど。入園して2、3日で震災が起きて、実家に帰ったので保育園を除籍になって実家の近くの保育園へいくことになり、転々としたのが子どもには申し訳なかったなど。友だちはできていたみたいですけど、「今度、ここへいくよ」となった時、子どもは引込み思案じゃないですけど、「我慢していたことがあったのかな」と感じましたね。
	遊び場	子どもたちが遊びたいので子どもだけ分かれていても、知らない子と遊んだり、ご飯を食べたり。広々としたところでホワイトボードとか、ダンボールとかで遊べる一角があるとか。体育館ではなくて、テントとか外の方が子どもたちは普段どおり遊ぶんですよね。子どもたちがイライラしたりするとお母さんたちもストレスが溜まる。子どもたちが発散してもらえるとお母さんも元気になるから、そういう場所も大事なのかなど。	
	養育者も楽しめる	イベント	ボランティアの方が教室で歌を歌って回ってくれて、避難されている方も歌を聞かれて、子どもたちも「よかったね」といっている。
		イベント	一週間くらいから青空教室でボランティアの方とか先生が音楽をやって教室を回ろうとか。
		イベント	宮城など実際に体験している子どもからお手紙をもらおうとジーンときていました。
		イベント	宝塚歌劇団の方がきてくださって、歌手の方がきてくださって、ふれあい動物とか。
イベント		動物園がきてくれた時は子どもたちも喜んで。ミッキーマウスとか。	
イベント	ドクターフィッシュとか。体に触れるもの、木のオモチャとか。子どもが喜ぶような。大人は芸人がくるとうれしいけど、子どもの遊びとかは少なかったかなど。触れ合うものがあるといいのかなど。		
イベント	イベントはやってもらった。		

表3 生活の安定に関するニーズ

生活の安定	避難	日常生活	トイレが和式で。紙を別にしないで紙がトイレに積んであってすごかったんですよ。便器が溢れるくらい感じで。トイレは困りました。 台車でバケツをもって山盛りになっている紙を退かして。「こんな感じなんだな、悲しいな」と。電気がつかなかったので車椅子のおばあちゃんがいらっしゃって。多目的トイレも真っ暗なので「見ませんから」といってライトをつけてドアを開けたりして。 コインランドリーもいっぱい。 洗濯も大変ですよ。
		避難場所	温泉を開放してもらうけど、一気に汚れがたまった状態で、小さい子どもたちにとっては衛生的にも入りたくないというか、我が家は八代まで行って親戚の家で入らせてもらって。2歳だったので。温泉もありかたいのだけど、子どもがいる世帯は、いけないかなと。 家にいると不安だから車中泊をする親御さんが多く、ストレスが溜まっておっぱいも出ない。インスタント食品が増えて便秘もするし、食事ですね。 おっぱいもあげないといけないので授乳室とかあったりするとうれしい。授乳の時間もとれるし。そういうスペースもあるといいのかなと。 グラウンドでテントを出してもらった。 庭先が広いので庭で車中泊をして様子を見ていた。 子どもがいる家は車中泊が多かったと思いますが、体育館の避難所に行くと「子どもが泣くと迷惑」とか気をつけて。ペットを飼っている家とかも。空間を分けるとかして「子どもたちはここに避難します。高齢者はこっち、ペットはここ」と分けてもらうと物資も運搬しやすいかなと。ボランティアも力仕事だけでなく、子どもを見てくれる人がいてくれたらなと。家に帰って掃除をしたい。子どもを見てくれる支援の形もあったらいいかなと。
		食べ物	支援がないとほんとに困りました。カップラーメンとか、ありがたかったんですが、何日も続くと、パンだけとか、おにぎりになると、贅沢ですけど、炊き出しは、ありがたかったなと。余震は納まったけど、子どもたちは「家の中で寝たくない」といって、1、2カ月は車中泊を続けました。困ったことは普段の電気がつかないことと食べ物、日常的なことですかね。 炊き出しは喜んでいました。「汁物がうれしかったな」と。
		日用品	支援物資を。ブルーシートとか、うがい薬とか。ベッドも。 ブルーシートは助かった。 制服もランドセルとかもありました。子どもたちには、とてもよかった。 小学校でもらいました。青空教室に箱がおいてあって「もらっていいよ」と。 1年とかたって「おむつが役場に余っています」とか「お尻拭きとかあります」と。ありがたいんですけど 県外の友だちから「物資を送りたい」と。どこに届けたいかわからない。どこかを通さないと受け入れができない。せっかくくださるんですけど、どこに届けていいか、わからず、もっていても「水はいっぱいなので受け入れられない」と断られて。 子どもの服を役場にもっていくと「うちは大丈夫なので益城の方に」といわれて益城に連絡したら「ありがたいが、配る手段がないから持ってこないでください」と。現場ではほしかった人もいるのに。 せっかくの物資だけど、そこにたどりつくまでが。
		生活	お風呂とかも。 お風呂も自衛隊から設置してもらって。 仕組みがもうちょっとしっかりできていたらいいのかなと。ボランティアのお掃除だけではなく、子どもたちを見てくれる人、遊んでくれる人でもいいし。
		情報	役立つ情報 炊く手段がないので誰かが声をかけてくれれば米を出すけど、水がないし。 水と炊き出しの場所ね。 それを持ち寄って「炊き出ししています」とか地区情報とかあるといい。農家さんが多い町だから。地下水を使って「うちにきて洗濯していいよ」とか。 ラインで地区のママたちが「ガソリンスタンド、あそこは大丈夫」とか自分たちで情報を回している。コインランドリーとか温泉とか。 不足した情報 「食べ物、どこにある」という情報がほしい。 妊婦だったため「血栓とか起こるから」と言われて、どこに避難していいかわからなくて、というのが現状でした。 車で移動する際に「この先はいけませんよ」というのが手前からわかるようにしてくれるとよかった。並んでしまうと抜けられないから。 指定されているのは小学校と公民館で。グラメッセは広いから「あそこにいけば」という感じでいったんですけど、違ったので、どこに行けばいいかわからなかったということがありましたね。

表4 防災に関するニーズ

防災	防災活動	準備	園では上靴をはいてそのまま避難する形に変わった。
			ポリタンクを買いにいった、あれが役に立った。水は会社の近くに「ただで汲んでいいですよ」といわれて助かった。
			オール電化なので止まったんですよ、台風の時。ガスボンベくらいしかない。
			支援級の同学年の子で、おむつでしかウンチしなかったりするから、うちの子だったら薬がいるかとか。
			防災袋を学校が立ち上げたけど、こっちからはこれを入れてほしいとは求められない。
			学校側の備蓄を見せてもらいたい。
			災害時の必要物品を学校に置かせてもらっても、それを知っている先生がいるかどうか。
			避難所も去年9月に避難体験とか行ったことはあるので場所があることは知っています。
			(避難所が) 近くにあるので、そこでお祭りがある機会があるので行ったことはある。
			保育園にいる時地震があった場合、保育園の建物は低いし、心配で。高さが低すぎだと思います。津波が来たら全然だめだと思います。
	防災活動	イベント	授業参観も親の参加率もよくて、生の米を入れて湯せん10分くらいでおいしいご飯ができる。ホットケーキや玉子焼きとか。シチューの素を入れて。そういう調理を知っているのと、知らないのでは、安心感が違うから。
			「防災クッキング」とか学校とか授業の一環に入れてもらって子どもたちも勉強する時間にやって。授業参観で。道徳の時間とかに。そういう時間を毎学期やるとかすればいいかもしれない。忘れちゃうから。
			興味がある人はいくけど、興味がない人はいかない
			防災活動も参加しないとと思うけれど。
			子連れでも参加しやすい工夫をしてほしい。
			(参加は) 一家に一人でもいいという感じなので。子どもたちが楽しめる見学ツアーとかあればいいなと。『こんなものがあるんだよ』と。
			子どもの年齢別に災害対策で必要なものがもらえるとか。
			何かもらえるとかあれば張り切っていく。
			どこかで安心しちゃう。こっちは大丈夫だという。
			避難所があるから安心というか。その時に感じた危機感がなくなって。
	防災意識	意識	(災害に対する心の備え) 全然してないですね。
			災害対策が少ない。
			いるんなどころに避難所が建っているの、すぐ行けるかな。
			その時は防災意識もありましたが、忘れてしまう。忘れちゃいけないんだけど。
非常袋も玄関に置いていたんですけども、だんだん奥にやって忘れて…			
定期的に災害について聞かないといけないなと。			
繰り返し、くどいように言ってくれた方が、ありがたいですね。			
思い出すことも必要だなと。あったことは、忘れはしないけど、そのことを常に話しているといいなと思います。			
町が、そういうイベントをやっていることを知らない人も多いと思う。			
「今月はこんなイベントします」という広報はきます。			
防災情報	情報	出産したところは別の地域だったので、メールとかでイベントなどの情報があるといけな。	
		保育園の避難所とか決まっているのかどうか、正直わからない。	
		(災害時) 自分達がどこに行けばいいかということとか。	
		親がいけないとして、どれだけ学校にいられるのか。何が揃っててという情報が無いから。	
		「絆ネット」が入ったんです。	
		参勤交代と言う行事では、自分で判断して着替えをして。臭い中でもやっていかないといけないとか。歩いていかないといけない。そういうことを体験すると、どんなことがあっても強い子になるかな。来年、ぜひ参加させたいと思ったんです。	
		参勤交代は経験させた方がいい。判断もできるようになる。	
		日頃から強くないと、いざという時に困る。	
		授業で「こういう場合はこうしたらいいよ。どこに避難しなさい」と。とっさには動けないけど、知識があると記憶に残っているかもしれないので知識として入れてあげておかないと子どもたちが困る。学校にいられたら親と別々なので「自分の身は自分で守る」教育が必要だなと思います。	
		「生きるための知識」ですかね。キャンプのようなものを義務化して火のおこし方とか。木によって燃えやすいものとか。毒虫を知っているだけでも違うかな。サバイバル教育の義務化かなと思います。	
教育の充実	生きていく力	自分が生きていけるようになるのは経験とビビらないこと。何があっても「こうすればいいよ」と。修学旅行でも急に電気を消してみても、モノの大切さを知ること。「これがないなら、どうするか」とか、経験できるイベントをやるとか。「サバイバルの教育をやる」。	
		学校でも「自分の命は自分で守る」と教えていただいているので。家でも「あなたのことは知らんよ。私に構わず、自分の安全なところにおきなさい」と。	
		「自分で生きていく力」は大切だと思いますが、「助けてください」といえるようにしておきたい。	
		知らない人に「助けてください」と言葉を出せるように。「困っています」と。	

表5_1 コミュニティ・エンパワメント実現に向けた要素（専門職）

目標の明確化	避難方針と判断	「小学校へ避難する」とマニュアルで決まっていますが、小学校の後ろの崖も危ないし、子どもたちが遊ぶものとか安心できる環境が小学校には揃ってないので「遠いけど、山の上の保育所に避難しよう」と、あの状況の中で決断して、私たちは命が助かったんです／どっちにしようと思った時、保護者の方がワゴン車で「こっちにいくぞ」と「とにかくいっしょにいこう」と。助かったから、よかったです、判断は難しいなと感じました。支所で一晩明かしたんですが、そこでも寒さを凌ぐのが精一杯で「帰る」という人も「今は待って」と引き止めたんです。
	避難所運営	「一回、受け入れてしまうと保育所を開設できない」という所長の断固とした考えで避難所にしなかった。それが保育所開所時に、すぐ開けられて、受け入れ体制ができたから、その判断が正しかったんだと後になって思いました（石巻）／ここは土足ではなく、みんな靴を脱ぐ習慣があったので、衛生面では、よかった。（石巻ヒアリング,1から）
	親子を守る	困ったのは寒かったこと、子どもたちが、寒さとトイレで困った。生理的現象は我慢できないし、止められないので。トイレですね。排泄の部分でこれからは避難した場合、人としてきちんと守られる部分を大事にして早急に考えていかないといけないかなと。／震災の時に生まれた子ども、乳飲み子だった子どもたちを年長で受け持ったんですが、大事な時に親の目が自分に向いていなかったという影響は大きい。落ち着きのない年代でした。
	長期的視点からの生活支援	水、電気、ガス等、「普段、あるものがないと、こんなに不便なことはないよね」という不安な気持ち／避難生活が長くお母さん自身が、精神的に落ち着かない感じで。
	年齢、立場による違いへの理解	いろんなところで話を聞くと、妊産婦や新生児を抱えた人たちが困ったと／だんだん慣れてくると子どもたちも、いつもの元気を戻してきて。避難所は共同生活なので静かにさせるための工夫をしても、だんだん人もイライラして「うるさい」とか「静かにしろ」とかいわれるので、限られたスペースで周りの人たちに迷惑にならないよう工夫を考えました。在宅の避難の人に物資が行き渡らない。避難所では余っているのに。
	心の健康への理解	子どもたちも地震の速報をケータイで音を聞くと、それを見て手が震えたり、動揺したりしてテレビを見せないように配慮されていました。「避難訓練があるけん、今日はいきたくない」という子どももいました／子どもを迎えにこようとしたお母さんが亡くなってしまって、そのことをいつ、どう伝えるかという部分で、すごく悩んで協議したんですけど、なかなか答えを出せず、その後も伝え方が難しかったなと思います／半年か1年くらいたってから円形脱毛症の子どもが出てきたり、かなり我慢しているところがあったのかなと思ったりしました／
当事者の参画	避難マニュアル制定への当事者参画	マニュアルが町にはできているけど、誰がつくったんだろう？ マニュアルづくりの時から意見を吸い上げてもらわんといかんですよね。誰がつくったわからないマニュアルはできていますが、凝りもせずに。
	避難所運営方針への当事者参画	「誰かがやってくれる」となっちゃうといけない。いっしょに考えていくのが大事なのかなと。／子どもさんとお母さんがいられるスペースとか、お年寄り安心して避難できる専用のスペースが必要なのかなと。／授乳室とかも。女性専用のスペースがなかったのは、避難所をつくるのが精一杯でしたけど、女性ゾーンを。女性に配慮したものが全国、どこでも災害がある中では必要ですね。
	主体性を取り戻す	何もなくなってしまって無気力になって大人の人たちが動けない状態で。保育が始まってからも80人くらい定員の時に130人くらい入っていたので机を折り畳んで座ってご飯を食べて。椅子もないし、机もない。部屋は狭いし、一生懸命保育を工夫してやっていただいて。不公平感がないように「こういうアイデアを出そうか」とか給食の先生たちが工夫してくれて。先生たちのパワーのすばらしさに感謝、感激です。
柔軟な参加形態の組織化	妊婦と乳幼児、病気や障がいのある子どもの居場所	アレルギーで喘息で持病の薬が手に入らず、薬を手に入れるためにいろいろ手段を工夫して。「おなか大きいからといって、あなたを最初に優先することはできない」とか「食べ物なくてもあなたを優先することはできない」といわれたり。避難所で赤ちゃんが泣いて「うるさい」といわれて「自分たちが避難できる場所はなかったのかな」という話を聞きました。／自閉が結構強いお子さんがいて、食べ物がこだわる。それが困った。当時いらっしゃったお医者さんに相談してルートを見つけていただいて。特殊な薬が手に入らなくて、きた方につけていただいて。大変だったなと思って。泣きながら来たんですね。そういうのが必要なお子さんが大変でした
	学生の参加と支援者	よかれと思って高校生がボランティアをするじゃないですか。相手から傷つく言葉をいわれて病院に通われたりして。／高校生や中学生にボランティアをするように通達が回ってきて。こっちが配慮してやらないと、心の傷になったりして。自分は「よかれ」と思っても、みんな気が立っているけん、発した言葉が子どもにとって傷に残ることもあるし、それで病院にいった人の話も知っている／「ボランティアをしたい」という気持ちもあってボランティアをするのはわかるけど、「場所を選択してやらないといかんかな」と思います。
	リーダーの存在	地域の特性があるので、私のいた地区はいろんな方が集まってきたのでリーダーも曖昧な状態だったので、そうなくなってしまったんですけど、組織づくりはすごく大事。そこなのかなと。ちゃんと統括していないトップだと、避難所がまわらない
	外部の支援者	ボランティアもいっぱいきて、ありがたいのですが、その対応が。してもらおうのはありがたいのですが、ボランティア対応が大変。贅沢な悩みですけど。／ボランティアの質って、ありますよね。それに尽きるかなと思いました。聞き方とか。興味本位のこともあるだろうし、「よかれ」と思ってしゃべっているけど、被災者が憤慨するようなことをいってみたい。「寄り添う」って難しい。こちらは被災しているけん、「ありがどうございます」といわなんけど、「それは違うよ」という。こっちの思いと違うところはあるなと。ボランティアも勉強を積んできてはられるとは思いますが。／最後のシメが「がんばって生きてください」「がんばってるよ」と。「これ以上、何を、がんばるの？」と。

表5_2 コミュニティ・エンパワメント実現に向けた要素（専門職）

地域諸機関のネットワーク化	避難に関わるネットワーク	北上地区で防災組織を、もう一回、発足しよう。自治会長や保育所、警察が、みんな集まって話しあいをして。ほんとに困ったお年寄りに手を差し伸べるのは私たちだけでは把握できないので組織が大事なのかなと。結構、頻繁に寄り合って大変だなと思って見ていたんですけど、いざという時に助けあえる。
	避難所運営に関わるネットワーク	小学校の先生たちは子どもの安否確認をされて避難所の設営にはかかわらなくなっていったんですけど、こちらは先生たちがそういう立場であることを知らないわけですよ。先生たちみんなが避難で忙しくて休む暇もなくされているのに「先生たち、何を、しよんなさつたろうか」という気持ちもあったそうです。／学校とのギャップを感じました／校内のアナウンスが流れると避難している人たちが並んでバケツリレーで「はい、いっぱいになりました」とか。人が、うまく回るようになるまでは、ある程度かかったけど、できるようになってからはみんな協力して
	健康支援と生活再建に関わるネットワーク	保育士であるがゆえに子どものケアの研修に、すぐいかせられたんです。聞くのはよかったですけど、私たち自身も被災しているので職員の中には研修を受けることによってフラッシュバックを起こして具合が悪くなって保育に支障が出てしまう人もいたんで、心のケアの研修も、もちろんプラスの面もあるけど、そうでない面もあったかな。電話が通じないんですけど、歩いてきて「ここだともらえるって聞いてきたので」といってきてくださって「伝わる力はすごいな」と思いました。
	地域外の専門職や民間団体とのネットワーク	自衛隊もいっぱい手伝ってくれた。関東の消防士の方が「実家の様子を見るために帰ってきた」と。その方が力仕事を手伝ってくださって、それがありがたくて、みなさん、忙しい時に頼みづらいこともあるけど、力を借りないといけないこともあるので、そういうのがあるといいなと。行方不明状態になっていたのを「ラジオ石巻」を通じて探していただいて。子どもたちのことも、職員も。一方で報道の方たちが取材されるために住民がタクシー乗れない。電話しても予約が埋まっていて乗れない。やっと見つけると半日後とか次の日とか。透析にいくとか子どもさんが病気がかかると困る。交通の便が困ったことです。
	切れ目のないつながりへの工夫	自分たちの組織だけじゃないということでのつながりをつくる。幼稚園では防災主任がいてやっているようですが、そういうのが必要な時代になってくるのかなと。双葉保育所では東北電力といっしょに「もしも」の時はいっしょにつれていく、大人の手があると安心だから。地域の人たちとのつながりが大事なのかなと。近所の人に顔を知ってもらって声をかけたり、所長先生といっしょに近辺の人たちにご挨拶にいたり。雪かきの時、手伝ってくれたりして。／我が子に「どうだった。何が不安だった？」と聞いたら「家族がバラバラの時間に地震がきたから、みんながどうなっているかが不安だった」と。夜中にきた場合の想定、日中きた場合の想定とか、阪神・淡路大震災は朝だったし。いろんな想定が必要なのかな。
定期的な成果のフィードバック	子どもへの継続的フォローアップ	震災の時の乳幼児、大事な時に親の目が自分に向いていなかった子どもたちは今、3年生くらい。親が自分を向いてくれなかった、その時期、不安に過ごした子どもたちは大変です／子どもの時の震災経験、大人の目がずっと引きずってきている。折り返してみると、そうだったのかなと。原因がそこにあったのかなと思われる子どもたちがいたので、その後の親のケアが大切で。引きずっているものはあるんだなと感じました／震災の頃に中高生だった、多感な子どもたちが今、親になっている。ネグレクトとか、DVまでいかになくても、人任せて、うまく親になりきれないみたいなのたちもいるのかなと感じているんですけど。それも影響なのか、わからないですが。
	専門職としての選択と行動	先生に「怪我をした人が多いんです」というと「自分が、みようかね」と一つ部屋をつくって、そこで先生が救護してくださるので私がマキロンを、ぐちゃぐちゃの中からとってリバーテープを貼って先生と処置したということでした。これが震災後、すぐのことでした。落着かない子ども、「どんなふうにしたら落ち着くのかな」と。自分の保育の力だと思っただけ。
	復興の実感	もう9年になるんだけど、今いる部署は市民相談で、子育てや妊娠中のこと、おじいちゃん、おばあちゃんの話の聞かせていただくんだけど、「震災がなかったら、こうはなかっていなかったんだろうな」と。離婚しないですんだらうな。この人たちは家族みんなで力をあわせていられたんだらうなと。沿岸部だけに漁業関係者とか、せっかく何億とかけて「さあ、これからやるぞ」という時に全部、ダメになって借金だけが残って家族も崩壊してしまったとか。でも女の人は強い、意外と。何と生きていくんだけど、取り残された男の人が「俺、どうしたらいいんだろう」と相談にきたり。中高生で愛情をいろんなところに求めにいて失敗してしまったりとか。人生が変わってしまった人が、いっぱいいるんだなと。今からも、どんどん出てくるし、続いていくんだなと。
楽しみをもたらず企画	子どもが心から楽しめる場所づくり	モノだけでなく「心のケアの支援」をいただいたこと、ボランティアがきてくださって「子どもたちを笑顔に」という気持ちで来てくださったことが印象的で、うれしかった／バルーンアートもいらっちゃったし、しゃぼん玉とかもいらっちゃったし。／お菓子もオモチャもいっぱいもらって。ウルトラマン、くまモンもきて地震がなかったら得られなかった楽しみを得たことができたかなと。／子どもたちと「今日、楽しかった」と思えるように
	誰もが楽しめる機会の提供	いろんな方が支援して下さってありがたいなと。芸能人がきたのがよかったなと。みんな動かさずずっと寝ているんです。することがないというか、不活発病ではないけど、ずっと寝ている。でも芸能人がくると起き上がるんです。歩けないような人も歩いている。芸能人がくるとずっとついて歩いて。芸能人がくると元気になる。立ち上がるから、いいなと
発展可能性の継続提示	子育てコミュニティの整備	「震災が3月でよかったな」というのはなぜかという、保護者との信頼関係が十分できていたこと、子どもたちの一人ひとりのことも把握できていて、送迎してくれる方がお父さん、お母さんでなくても、親戚の方とかでもいい。
	発災前からの自助、共助など	私たち、体を鍛えておかないといけないなと思います。何もなければ歩くより他なくて歩いて何キロ歩きましたかね。こんな大きいママができました。それくらい歩く体力をつけておかないと。情報の意味では「詳しくはホームページをごらんください」とあるけど、お年寄りにはホームページを見られないし、ラジオとか防災無線とか、みんなに必ず届く情報発信が大事なんじゃないかなと思うんです。私たちが行政からの情報だけでなく、自分たちで身を守らないと。避難訓練を毎年繰り返してやっていたので先生たちも何かあった時も5分で着替えが終わる。1時間のお散歩コースも走れば20分でいけると伝えあっていたりして、それを経験していたのでスムーズに避難することができた／「自治体だけに頼る時代でもないな」と震災の時に思ったし、自立を自分たちでしていかなければ。頼ってしまうとだめなんだよね。できることも、できなくなったり、しなくなったりする。